



アストロツーリストのまなざしをめぐる考察 ー後期近代ツーリズム論からプラネタリウムを アストロツーリズムに位置づける

和歌山大学観光学部 尾久土正己研究室 澤田 幸輝

I. はじめに

アストロツーリズム:

「天文現象を求めて日常生活圏から離れる諸活動」

☆ 奄美大島における皆既日食で13,000人の観光客が来島

☆ 阿智村 → 「星空」で町おこし

☆ Lonely Planet “*Dark Skies*”の発刊

⇒ **国内外で注目を集める観光形態**



国内の観光学研究の蓄積が十分ではない

〔国外での論調〕Weaver(2011) “celestial ecotourism”:

ecotourism where the interests of visitors is focused on the observations and appreciation of naturally occurring celestial phenomena. This **excludes** **planetariums**... settings based on ‘captivey’. = プラネタリウムは対象外



日本におけるアストロツーリズム発展の系譜

= **プラネタリウムとは不可分の関係**

cf) 野外で星空を観た観光客: 「プラネタリウムの星みたい！」

⇒ **コピーがリアルを超越した観光**

アストロツーリストはポストツーリストとして
星空を楽しんでいるのではないか？

II-1. 「ラッシュ期」のプラネタリウム

プラネタリウムの現況

・国内の来館者数: 2000年から2017年で1.3倍増加

・国内の館数: 米国に次いで2番目に多い

⇒ 日本: 「プラネタリウム王国」

「**ラッシュ期**」: プラネタリウムが増大した70-90年代

「**変革期**」: 映像技術に変化が生じた2000年代以降

ラッシュ期にプラネタリウムが増大した要因

1. スプートニクショックに伴う学習指導要領の改訂

・1958年・1968年の改訂で理科授業時間数が増大、とりわけ天文教育への傾斜的教育が成される

2. 都市化の進行と光害の顕在化

・高度経済成長期に伴う都市圏への人口集中と第二次ベビーブーム

・光害の顕在化 cf) 光害については環境省HPを参照されたい

→ 天文教育の推進に力点を置いた学習指導要領に反し、都市に住まう子どもたちは光害の影響で星空が見えなくなった

⇒ プラネタリウムへの需要が高まる(=建設ラッシュへ)

☆ **ラッシュ期は教育施設としての側面が強かった**

II-2. 「変革期」のプラネタリウム

・2000年代から利用者数が減少 (=斜陽産業へ)

⇔ プラネタリウム業界に新たな動きが生じる

変革期におけるプラネタリウムの特徴

1. 投影できる恒星の数が肉眼でのそれを凌駕(= **ハイパーリアル**)

・肉眼で確認できるのは5000個であるのに対し、大平貴之氏の「メガスター」では100万個の投影に成功、業界会社もそれに追随

2. プラネタリウムの「多目的化」

・スポーツ映像や観光映像など、天文学と関連のない映像を投影

3. 来館者の視聴様式の変革

・「ウォークスルー型プラネタリウム」: 席に座らないプラネタリウム

☆ **変革期はエンターテインメント施設としての側面が強まる**

III-1. ポストモダン化するプラネタリウム

☆ **ラッシュ期**: 「集合的まなざし」が向けられる

・国による理科教育推進の下、義務教育生徒を中心とした集団(マス)に対して画一的な投射物を投影

→ 2000年代以降、「集合的まなざし」が機能不全に
eg) 少子化、校外学習先の選択肢の増加、ゆとり教育 etc.

= ラッシュ期は国による社会制度によって形づけられた集合的まなざしを通してはじめて成立しえた

☆ **変革期**: 「ロマン主義的まなざし」への応対

・ロマン主義的まなざしを欲すポストツーリストの台頭

eg) コニカミノルタ「天空」の「三日月シート」の人気

・「多目的化」するプラネタリウム

→ 来館者たちは他者との差異を求め、それに応じるようにプラネタリウムは自身をポストモダン化した

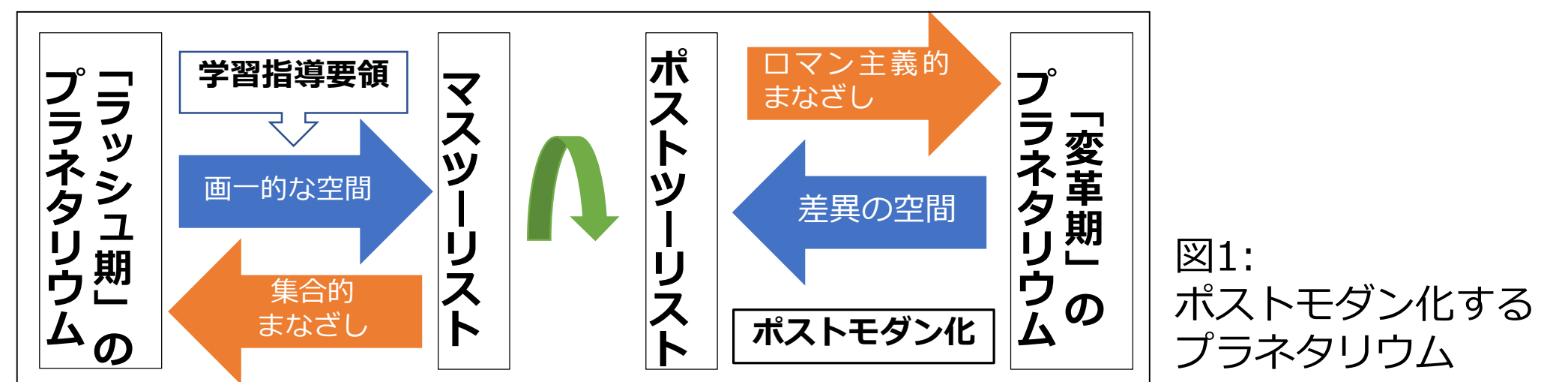


図1:
ポストモダン化する
プラネタリウム

III-2. プラネタリウムが投射するまなざし

プラネタリウムがポストモダン化することによる帰結

・プラネタリウム間での差異の極小化

→ 新たな差異の体系をプラネタリウム以外で求めるようになる

= 野外で天文現象を観望する観光客の出現

eg) 「宙ガール」, Bump of Chicken 『天体観測』

⇒ 地方に向けられた新たなまなざし

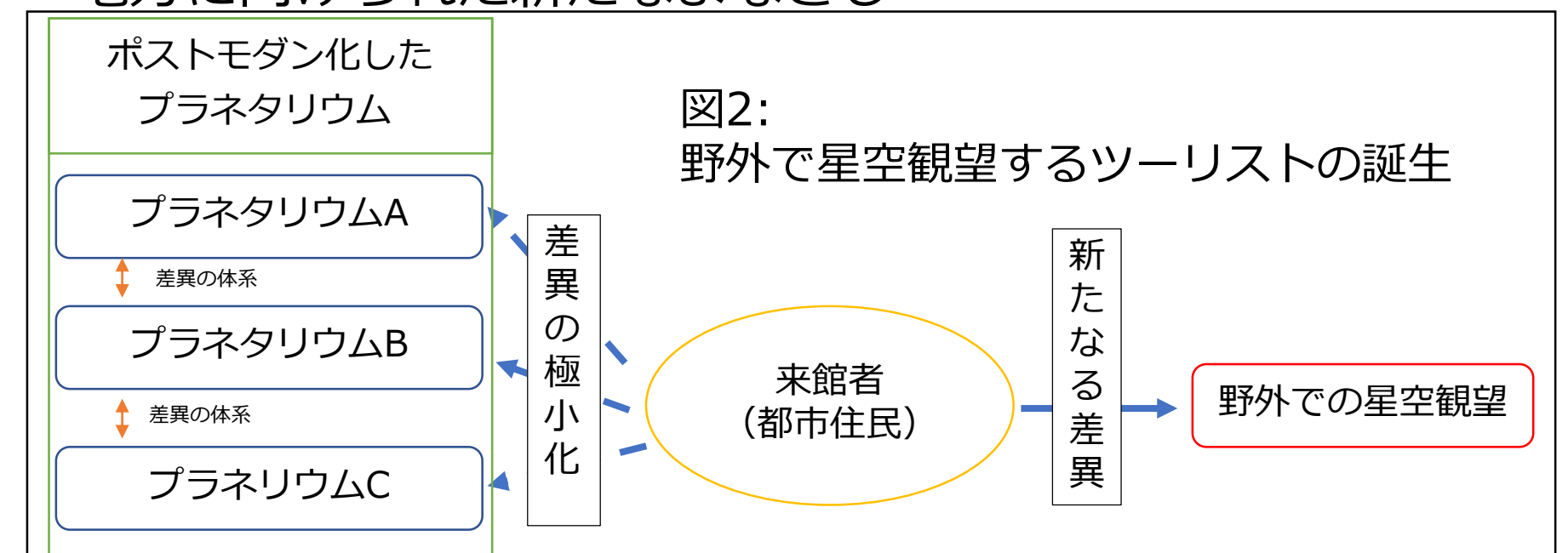


図2:
野外で星空観望する
ツーリストの誕生

・ハイパーリアルの内部化

・都市住民は、野外での星空観望に先立って、肉眼では見られない恒星をプラネタリウムで観ている

→ 都市住民にとって、ハイパーリアルな恒星が「リアル」な恒星に

⇒ 野外で観る恒星はもはや「リアル」ではない

cf) 「ハイパーリアルな旅」「シミュラークルの世界」

IV. 結論

「ラッシュ期」の基盤は、義務教育生徒を中心とした「集合的まなざし」であった。しかし2000年代以降、「ロマン主義的まなざし」を欲するポストツーリストが台頭したことで、プラネタリウム自身がポストモダン化した。それが「変革期」である。ポストモダン化したことは、かえって都市住民の間でプラネタリウム以外の空間で差異を見出す欲求が生じ、その結果、野外で星空観望する観光客が表出した。しかし、彼らがまなざしている星空は、プラネタリウムによって内部化されたハイパーリアルな星空を決して超越できないのである。

主な参考文献

大平貴之(2016)『プラネタリウム男』講談社現代新書
尾久土正己(2018)「天文教育から天文観光へ」『観光施設』325, 28-31
——(2019)「プラネタリウムの新しい利用に向けて」『映像メディア学会誌』73(3), 475-480
Baudrillard, J. [今村仁司・塚原史訳](1970=1979)『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店
Urry, J. [加太宏邦訳] (1990=1995)『観光のまなざし』法政大学出版局
Weaver, D. (2011). Celestial ecotourism; new horizons in nature-based tourism. *Journal of Ecotourism*, 10(1), 38-45